



静脩

2008年3月

The Kyoto University Library Network Bulletin

Vol. 44. No. 3・4
合併号

特集 学術情報リポジトリ・シンポジウム

京都大学図書館機構は京都大学学術情報リポジトリ検討委員会と共催で、平成19年10月24日に京都大学芝蘭会館において、図書館機構公開事業「大学のたわわな果実がどれほど甘く熟しているかをじっくり味わうには - 機関リポジトリによる教育研究成果の発信と効果的利用 - 」を開催し、46機関から109名の参加がありました。

2回目となる今年度のシンポジウムは、大学の教育研究成果の確実な収集と効果的な利用という、機関リポジトリの新たな展開に向けて、コンテンツ作成者と利用者の双方の立場から、大学で育まれる豊かな果実を十分に味わう方法を話し合う場として開催されました。

本号ではシンポジウムで発表された、基調講演、事例報告、討論会の概要を「学術情報リポジトリ・シンポジウム」特集としてまとめました。

主催者挨拶

京都大学理事・副学長 西村 周三

本日はようこそ平成19年度京都大学図書館機構の公開事業にお越しくださいました。

本学においては、平成17年10月から学術情報の流通体制を整備するための、学術情報リポジトリの整備に務めております。



これは、大学で生み出される成果を、学外に無料で発

信し、大学の社会的説明責任に貢献するというものであります。

一見すると、これは簡単な事業のように見えるのですが、実際はそれほど簡単ではありません。相当多額の費用を要する事業でありまして、さらに、この事業の整備は将来、電子ジャーナルの在り方をめぐる議論にも大きな影響を与えるというふうに考えております。

京都大学の学術情報リポジトリに関しては、平成17年10月の役員懇談会におきまして、NIIの次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業に参加することが承認され、同年11月には情報

担当理事を委員長とする学術情報リポジトリ検討委員会が設置され、附属図書館が事務局を担当するということになりました。

平成18年度からは、総長が本学で特に強化したい事業としてイニシアチブをとられてこの事業が推進されてきました。本年度は図書館協議会において、積極的に機構の事業として関与推進することが了承されております。

本学のリポジトリは3年目に入ります。本文を登録したものは、本年9月に1万件を突破しました。これは全国の大学のうちで五番目に早く、近畿では一番早いということ聞いております。メタデータを含めると、すでに2万2千件を超えております。

私どもは、この事業はすでに導入段階を終え新たな段階に達したと理解しており、これからは紀要・学位論文だけでなく、入手が困難なシンポジウムや研究会の記録など、印刷された資料だけではなく、画像、映像、音声

など、多様なデジタル資料も検討し、その他学内の情報発信支援を視野に入れております。

このシンポジウムは、昨年12月20日に桂キャンパスでおこないました。前回もたいへん盛況でしたが、今回は国公立の大学図書館、その他公立図書館、国会図書館など、北は山形、西は山口まで、全国各地からご参加の申し込みをいただきました。

今回の講演は、さきほどから出ておりますが、文部科学省の膝館専門官、それから名古屋大学附属図書館の伊藤館長のお二人に基調の講演をいただきまして、そのあと京都大学の中の事例報告を三つおこないます。そして、フロアを交えた討論会をするという予定であります。どうか最後までご参加いただいて、活発な議論をして、この後の発展に役立てたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

(にしむら しゅうぞう)

基調講演(1)

大学図書館と機関リポジトリ(IR)

文部科学省研究振興局情報課学術基盤整備室情報研究推進専門官

膝館 俊広

本日は、機関リポジトリにつきまして、文部科学省の担当官として、今までを整理しながら、お話をさせていただきます。

大学図書館に関する各種審議会報告等

1973年の学術審議会学術情報分科会の『学術情報流通体制の改善について(報告)』にはじまり、学術情報ネットワークが整備されていく中、1993年の学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会『大学図書館機能の強化・高度化の推進について(報告)』においては、

この学術情報ネットワークを利用した図書館機能の充実が掲げられています。さらに1996年の学術審議会『大学図書館における電子図書館機能の充実・強化について(建議)』のなかでは「大学図書館は、電子的情報資料への要求に適切にこたえて、それらを収集・整理・保存し、また、ネットワークを介して提供するとともに、外部の情報資源へのアクセスを可能とする、新たなサービスを展開しなければならない」と、何となく今の機関リポジトリにも近づいてきたような提言が、この頃か



ら見られます。

2002年の科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会情報科学技術委員会デジタル研究情報基盤ワーキンググループ『学術情報の流通基盤の充実について（審議のまとめ）』においては、機関リポジトリという言葉こそ使っておりませんが、その中では「総合的な情報の発信窓口（ポータル機能）というものを設置し、統一的な規格によって情報を発信する必要がある」、「大学図書館が中心になって、情報の形式、登録方法などに関する統一的なルールについて、学内での合意を形成する必要がある」と、まさに機関リポジトリと言っても過言ではないものが提言されておりました。

そして2003年、今までの審議会報告を踏まえまして、文部科学省振興局情報課に学術情報発信に向けた大学図書館機能の改善連絡会が設置されました。先の建議により電子図書館機能を整備していた京都大学をはじめ15大学にご参加いただいて、各大学の改善への取り組みを調査し、まとめたものが『学術情報発信に向けた大学図書館機能の改善について（報告書）』で、千葉大学における取り組みが機関リポジトリ(IR)という言葉で紹介され始めました。

2006年3月には、学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会『学術情報基盤の今後の在り方について（報告）』が出されました。この報告は、今後の大学図書館の方向性を示すと言いますか、私共も含め大

学図書館は、この報告に沿って現在取り組みが行われているところであります。この報告は三部構成で、第二部と第三部に「大学からの情報発信力の強化、社会に対する説明責任、オープンアクセスへの対応の観点からも有用な手法」であり、「各大学は学協会と連携しつつ、機関リポジトリに積極的に取り組む必要がある。その場合、大学図書館が機関リポジトリの構築・運用に中心的な役割を果たすことが期待される」と、大学図書館による機関リポジトリの推進が掲げられています。また「文部科学省においては、国立情報学研究所が行なう機関リポジトリ構築・連携支援事業などを通じて、そのような取組の支援を行なうことが考えられる」と大学、国立情報学研究所（以下NIIとする）、文部科学省がやるべきことが端的に述べられている報告になっております。なお、これをまとめあげた作業部会は今後も継続してフォローアップをしていくことを予定しています。

NIIとの連携による機関リポジトリ(IR)の構築・運用

NIIには、学術コンテンツの確保・構築への取り組みとしてNII-ELS、NII-REO、KAKEN、NACSIS-CATといった機関リポジトリの土台が既がありました。NIIにそうした既に電子化されたデータがあったということに起因するものであると思っておりますが、まず紀要論文をコンテンツとして機関リポジトリに搭載するという大学が多かったようです。こうしたことからNIIと大学が連携して機関リポジトリが構築されるきっかけとなりました。NIIによる連携支援の方針、方向として三点あります。

第一は、CSI（最先端学術情報基盤 サイバーサイエンスインフラストラクチャ）の委託事業として、機関リポジトリの全国的な展開のための資金提供及び構築・運用及び先端的研究開発の連携支援です。平成16年度から試

験的な実装実験プロジェクトが始まり、次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業という名称で、平成18年度から各大学に公募をし、本格実施となりました。現在、60機関の機関リポジトリが立ち上がっています。なお、NIIの委託事業に参画せずに機関リポジトリを立ち上げている機関も2機関あるとのこと。第二は、システム連携事業で、メタデータのフォーマットの設定及び各機関・各大学の機関リポジトリを横断して検索できるシステムの構築です。第三は、コミュニティの形成事業で、研修・報告交流会・オープンハウスワークショップ・シンポジウム開催に対し、NIIが支援を行うということです。

世界的に見ると、今年7月末現在、世界で912機関の機関リポジトリが構築されており、登録レコード数は、全世界で665万件という数字で、日本のコンテンツは47万件で、世界第2位となっているようです。(資料1「世界での位置づけ」)

収録コンテンツの現状でございますが、平成18年度は紀要論文が半数近くを占めており

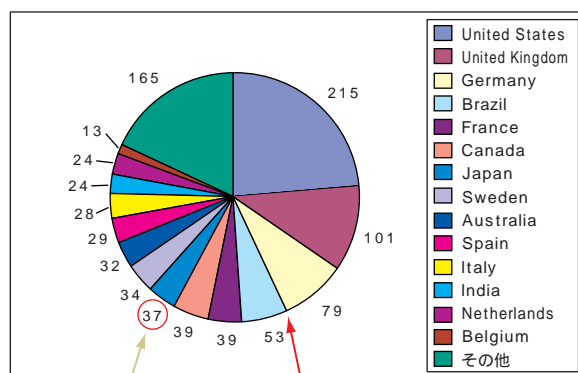
ます。(資料2「収録コンテンツの現状」)平成19年度末には、学術雑誌論文が倍近く、学位論文も大幅に増える予定と聞いております。なお、資料3の「データ」というのは千葉大学が予定しているサイエンスデータ、様々な観測のデータを登載する予定とのことです。(資料3「19年度末の予定」)

各大学の特色ある取組

北海道大学では「月平均4万回ダウンロードのうち、個別状況を文献提供教員へ月1回メールで通知する」ということに取り組んでいます。どれだけいつ誰に利用されたかという情報にはニーズがあり、継続して教員からの協力を誘引できるのではないかと思います。学長自ら機関リポジトリを大学のポリシーとして位置付けて大学教員の方に協力を呼びかけておられる大学、機関リポジトリ掲載の許諾を得る事務をシステム化する工夫をされている大学、収集戦略(何を狙ってコンテンツを充実しているのかという目的)をはっきりさせた大学、その大学の特色をよく生かした

資料1. 世界での位置づけ

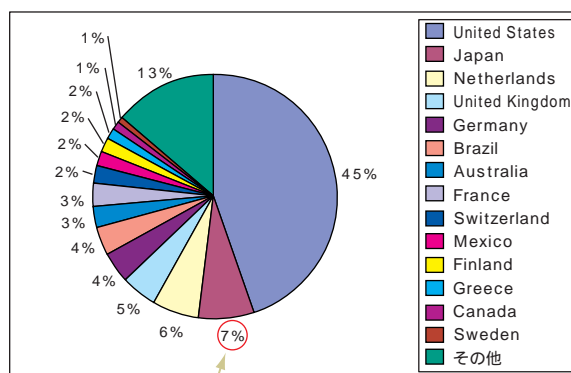
■ 世界で構成されている機関リポジトリ：912



■ 実際には60機関(4位に浮上)

■ 日本は37機関が登録済みで、世界第7位に位置している。平成19年度～70大学にCSI事業委託。世界第4位に浮上する。

■ 機関リポジトリのレコード数：約665万件



■ 日本のコンテンツ登録数は約47万件。コンテンツ数：世界第2位
コンテンツ数の平均値：世界第7位
コンテンツ数の中間値：世界第10位

POAR : Registry of Open Access Repositories <http://roar.eprints.org/> (参照：2007/07/31)

取り組みをしている大学等があります。また、地域リポジトリ構築という新たな取り組みを地域で連携・共同して行っている大学もあります。

これらに共通しているのは、計画性があること及び、無理をしていないことではないかと考えます。加えて、大学には入手困難な資料や埋もれている資料、そのままではいずれ消えていってしまう資料があるでしょうから、機関リポジトリに何でも入れるという姿勢もあるものと思っております。

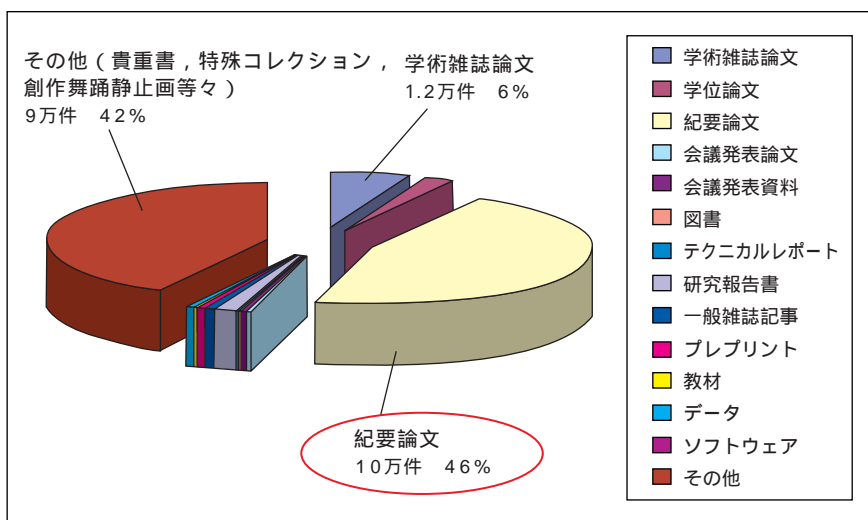
各大学の課題

機関リポジトリの課題の一つが、著作権処理の問題です。この処理事務は煩雑ですが、省力化の工夫も見受けられます。例えば、NIIの委託事業の領域2「国内学協会等の著作権ポリシー共有・公開プロジェクト(SCPJ)」では各協会にアンケート調査を行い、どういったポリシーでやっているのか情報提供しています。また、NIIにおいてもCiNiiにおいて無料一般公開の提供条件で学協会誌を公開している学協会に対して、機関リポジトリでの

利用許諾にかかる包括承認が取れないか交渉をしていると聞き及んでおります。これについては、ある学会誌に関して包括承認を取ることができたため、学術論文の機関リポジトリ登録数が一挙に増えたという大学もあるとのこと。また、学位論文に対しては機関リポジトリ登録のための著作権処理依頼を学位論文提出時においてシステム化するとか、既提出分の遡及は著作者に連絡をとるのが困難なため基本的には行わないという方針をとっている大学もあるようです。

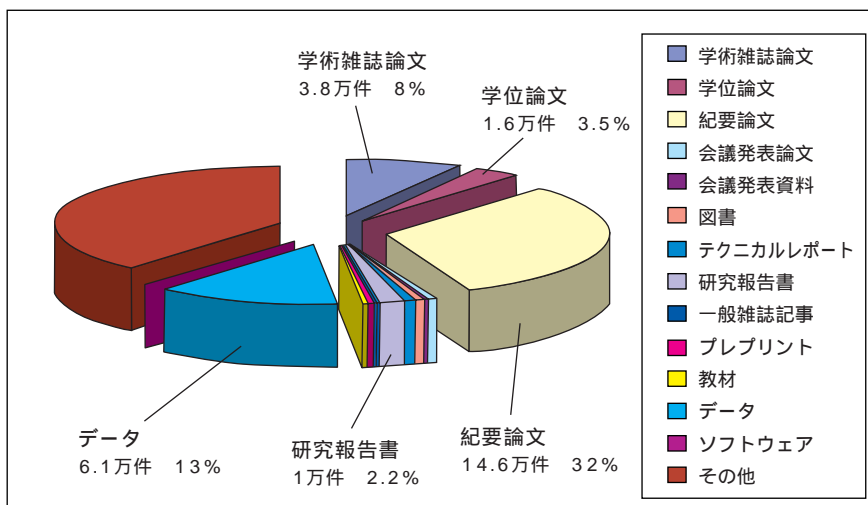
電子化作業について、ポーンデジ

資料2．収録コンテンツの現状



『次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業中間まとめ(平成19年3月)』による

資料3．19年度末の予定



『次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業中間まとめ(平成19年3月)』による

タルでないものについては、サービスとして電子化を図書館で行うという取り組みをされているようです。

コンテンツ提供者である教員の方々の機関リポジトリに対する理解・協力を得ることがたいへん重要になります。教授会或いは個別に訪問しての説明、広報活動、ダウンロード数の通知などが、教員の方々の理解・協力を誘引するのではないかなと思っています。

機関リポジトリ (IR) にかかる情報課の考え方

『学術情報基盤の今後の在り方について (報告)』の中において、機関リポジトリの有用性として「大学からの情報発信力の強化、社会に対する説明責任」が掲げられています。

また、大学図書館では、従来からの学術情報資料の保存・蓄積に加えて発信を自主的に行ってきたておりましたが、この機関リポジトリの構築により、自主的な役割から大学のポリシーによる役割を果たすということに変わってきているのではないかと考えております。

これらを踏まえ、同報告にあるように、文部科学省はNIIを通じてその取り組みの支援を行うことが必要と考えております。

現在、情報課では、支援策の検討を開始しておりますが、検討状況として三つのことをご紹介します。一つは、「オープンデジタル」というキーワードです。科研費の研究成果報告書をインターネットでの公開に変更することを、科学技術・学術審議会学術分科会研究費部会において審議中であり、きっかけのひとつになるのではと考えています。また学位規則により印刷公表と定められている学位論文についても電子媒体での公表の可能性について模索しております。二つ目、NIIに対する支援については、NIIの今後の事業計画を

視野に入れながらの検討を考えているところです。三つ目、国立大学法人に関する年度評価、あるいは中期計画評価等において、機関リポジトリへの取り組みの積極的評価を検討しております。

まとめ

最後に教育系・文系の九州地区大学間連携論文集の取り組み例をご紹介します。紀要論文の中から選定を行い、編集委員会による査読というプロセスを経て、九州地区での新たな論文集について機関リポジトリを活用して刊行・公開しようという取り組みです。言い過ぎかも知れませんが、新たな学術情報流通改革へのチャレンジであり、機関リポジトリをさらに発展させたかたちとして注目・期待しております。

以上申し上げたことから、機関リポジトリにかかる大学・NII・文部科学省の役割は以下の通りと考えています。大学は「大学のポリシーの下、大学図書館を運営窓口として主体的に成果の蓄積・発信を行なう機関リポジトリの主役」です。NIIは「大学との連携をもとにした呼び水の支援、NIIのデータベース充実と連動したコンテンツの電子化支援、それから運用システムの高度化支援、大学横断的なプラットフォーム構築による支援、および人材育成支援を行う、大学のパートナー」となります。そして、文部科学省は「大学における機関リポジトリの有用性についてコンセンサスを形成のうえ、大学(図書館)が担う運営業務にかかる支援、NIIの事業に関する支援を行うサポーター」と考えています。そのことを踏まえ、今後とも検討を進めてまいりたいと思っています。

(ひざたてとしひろ)

基調講演(2)

機関リポジトリが大学にもたらすもの、変えるもの

名古屋大学附属図書館長 伊藤 義人

名古屋大学の図書館長となって8年目になります。年々雑誌価格が上昇して購読雑誌を中止しなければならないシリアルズ・クライシスといわれる状況の中で、国立大学図書館協議会でタスクフォースを立ち上げて出版社と交渉をしてきました。大学間の情報格差を小さくするために規模に応じて料金をとるような体系も作って大規模大学以外でも契約タイトルが増加するなど一定の成果を得てきました。しかし残念なことに雑誌は世界的なものですから値上がりそのものは止まっていなくて毎年約5パーセントのお金を積み増さないと現状維持ができないという厳しい状況になっています。現在は電子ジャーナル購読方法の政策変更をしようということで検討していますが、これについては最後に述べさせていただきます。

機関リポジトリの大学での役割

さて、いまや公式のホームページを持たない大学はないと思います。もちろん受験生も見ますが大学自身の存在価値を示すためにこれなしでは考えられないという時代になります。



した。学術機関リポジトリも同様です。これなしには大学は社会への説明責任を果たすことはできない、大学全体としてそういう覚悟で臨む必要があるということを申し上げたいと思います。

研究者は研究成果を発表するのが務めですが、商業出版を経由した場合はその雑誌を買っている人、あるいはそこにアクセスできる人だけしか読むことはできません。ところが、それをリポジトリに入れると、学術論文等の全文を世界に向けて発信することになります。誰もが無料でアクセスできるということで、非常に視認性(Visibility)がよくなり、たくさんの読者を獲得できます。

視認性が増したという事例もたくさん報告されていますが、残念ながら現在の学術機関リポジトリはまだ赤ちゃんでして、現実には本当に研究者の役に立つかというと、まだほとんど役には立ちません。特に専門性を持っている研究者であれば、機関リポジトリをあてにしている人は、まずほとんど学内にはいないと言っていいぐらいです。ただし、これから先、ある程度データ蓄積が進めば、ある著者の著作物情報を一元的に検索することもできるようになります。通常であれば、いろいろなところに論文を投稿されると全部集めてくるのが非常に難しいですけれども、そういうことも可能になります。

先生方はホームページで公表しているからいいじゃないかと言われるのですが、もし定年退職されたらお弟子さんは絶対消してしまうし、続けて掲示なんかしてくれませんよ。大学が責任を持って維持するリポジトリとい

うものが非常に安定性があると説明するとよく分かってくれます。それからいわゆるハンドドールですが、論文あるいは資料には、固有のURLが付きます。サーバが変わってもURLは変わりませんので大学が存在する限りずっと永続的に維持されることも非常に大事なことです。

それと、強調したいのは、学術情報流通の商業出版の寡占化が進んでいて値上げで苦しんでいるのですが、そういうものに対して、この学術機関リポジトリが新しい学術情報流通の手段としてぜひぶん有用になります。学術情報の流通の主導権を商業出版から一部取り戻すための方策として非常に役に立つはずです。名古屋大学では、ホームページの総長室のページに「大学の事業として継続し続ける」と明確に定義を書き添えて、第2期の中期目標・中期計画の中に、きちんと入れてもらおうとしております。

名古屋大学の機関リポジトリの特徴

収録の一覧(図1)を見ていただければ分かりますが「紀要」が非常に多いです。私は紀要なんていうのは、文系では使われるかもしれないけれど、紀要をこういうリポジトリに入れることに関して非常に懐疑的だったのですが、実際に入れてみるとかなり利用が多いです。

図1. 収録件数

学術雑誌掲載論文	710	貴重書	30,406
学位論文	353	Webサイト情報源	1,916
紀 要	4,580	オープンコースウェア	33
教 材	57		
そ の 他	168	合 計	38,223

(平成19年9月30日現在)

商業雑誌も含めて学会誌の論文も入れるようにしていますが、こちらは著作権処理など

が難しくてそう簡単には増えないというのが現状です。

また電子図書館ということで蓄積してきたナレッジ・ファクトリー、これは名古屋大学が生産した研究成果だけではなく、保有するデジタルデータ、たとえば貴重書の画像だとかいろいろなものも電子化をしておりましたが、それらのデータ、それから学内のWeb情報、あるいは教育のソフトウェア、すなわちオープンコースウェアというものも入れていますが、これらはリポジトリが始まる前からの蓄積があって、それにメタデータをつけて入れています。

大学としてリポジトリをやるときに、もちろんすべての先生方に協力をお願いしているのですが、総論には賛成してくれますが、現実にデータを出してくれるかという、なかなか出してくれないというのが現状です。研究者というのは、論文を書くのには熱心ですけれども、書いてしまったらそのあとは何もしたくないというのが本音です。そこで単に総論的な理解だけではなくて、具体的に動いてくれる研究者でコミュニティを形成しております。これは評議員や各研究会の非常に熱心な先生方などを集めています。いま100人ぐらいですけれども、できたら数百人規模にして、リポジトリのサポーターのコミュニティを作ろうとしています。それを図書館が管理・サポートするというような、そういう仕組みを作って、そのコミュニティから周辺の人をリクルートしていただく、ということをやろうとしています。

図2はNAGOYA Repositoryのダウンロードの統計です。だいたい平均で毎日200ユーザーがきていて、1人当たりだいたい6.1ページぐらい閲覧しているようです。日本からもちろん一番多いのですが、東南アジア、北米、欧州からもやって来ます。残念ながら名古屋大学のリポジトリの窓口、あるいはNIIの窓口からではなくて、大半がGoogleだ

図2. NAGOYA Repository タイプ別ダウンロード数

資料タイプ	登録件数	総ダウンロード数	1件あたりの 平均ダウンロード数
学術雑誌掲載論文	710	33,974	47.9
学位論文	353	88,404	<u>250.4</u>
紀 要	<u>4,580</u>	<u>206,189</u>	45
教 材	57	39,788	<u>698</u>
そ の 他	168	13,434	80
計	5,868	382,040	65.1

とかYahoo!から飛んできているのが現実のようです。

紀要は非常にたくさん入っていて、総ダウンロード数でいえば、もちろんトップですが、一つの紀要あたりのダウンロード数は45ぐらいで通常の学術論文とほとんど変わりません。

ところが、学位論文は、まだ350点ぐらいしか入っていないのですが、ダウンロード数が非常に多いのが特徴です。1学位論文あたり250ぐらいのダウンロードがあるのですが、オリジナルで、研究成果としてまとまっております、それが国会図書館まで行かなくてもデジタルで読めるということで、学位論文のリポジトリへの登録は価値があるようです。意外に多いのが教材です。実際に教育に使う材料なのですが、ダウンロード数は非常に大きくなっています。おそらく、この傾向はどの大学もほとんど変わらないのではないかと思います。

研究者協力コミュニティへこれらの数字を出して、これくらい役に立っていますよということで、必ず登録論文のダウンロード数などを定期的に通知しています。

機関リポジトリの課題

電子ジャーナルの価格高騰に対し何らかの政策変換をしないとやっていけませんので、

安価でかつ高度な学術情報流通網をつくろうと検討を始めています。

SPARC運動であるとか、Open Access運動、あるいは世界の図書館の連合でいろいろと声明を出したりしたのですが、出したに過ぎないというのが現状です。商業出版社にいくら値上げのないモデルをつくれと言っても、営利あるいは株主収益が第一ですので、それはやはり無理な話で、現実にはいろいろな投資ファンドが出版社を売り買いするような時代になっています。中長期の学術情報流通の改革を目指すために、このリポジトリを使おうということを提案しようとしています。

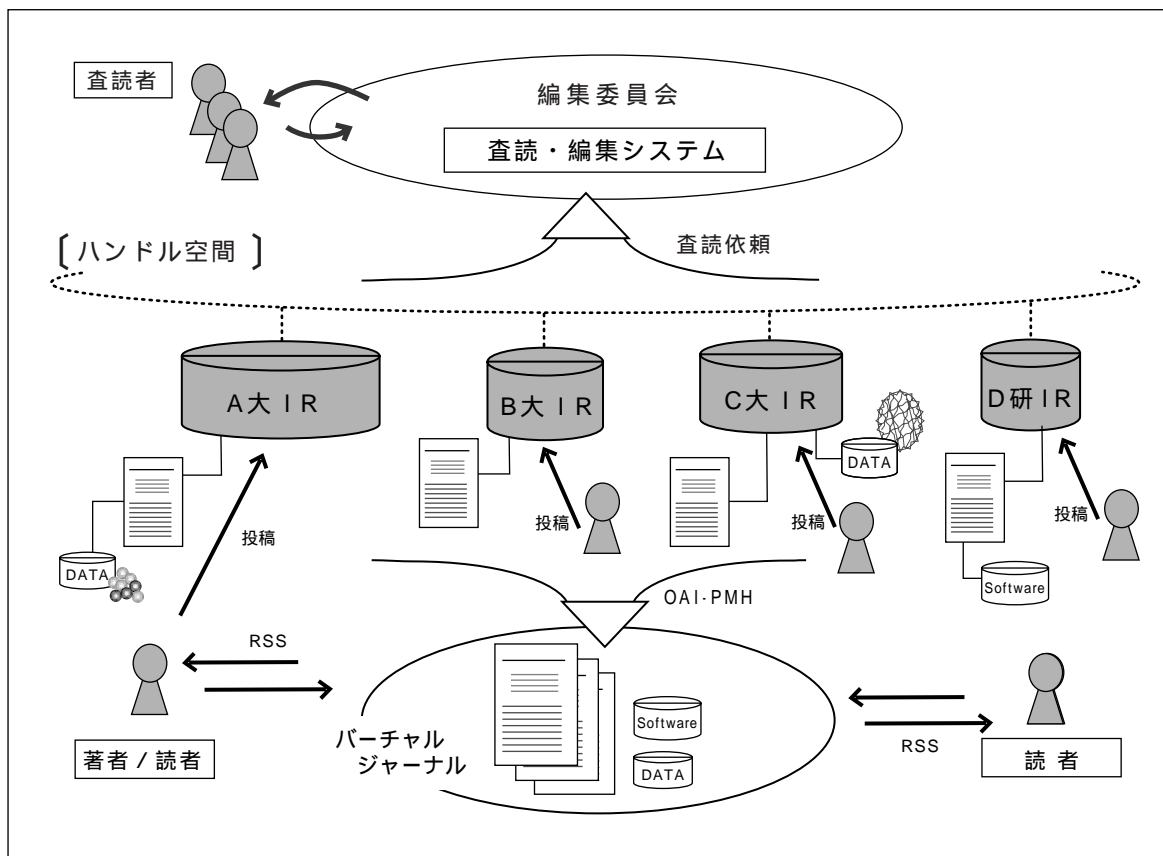
具体的には、学術機関リポジトリがかなり整備されるようになってきましたので、それを使ったバーチャルジャーナルを創造したらどうかということです。単に出版社がやっている電子ジャーナルではなくて、学術機関リポジトリを電子出版のプラットフォームとして使い、新しい高度化した学術情報メディアを創造するということです。(図3)

実際に機関リポジトリ群と、外部の査読システムをうまく連携させることによって、新しい電子ジャーナルを創造できると思います。もちろん国際的に高度で先端的な水準を維持するためには査読システムのある、質の保証ができるようなものを作る必要があります。バーチャルジャーナルのメタデータを取り込んで、ずっと永続的にそのバーチャルジャーナルが読めるようになっていくことで、読者は完全にフリーで読めるようになります。

大学が情報を生産するだけでなく、学術情報流通の一部主体となることも、機関リポジトリを利用することによって可能ではないかと思います。そのためにも、大学およびその連合が学術機関リポジトリを今後成長させていく必要があるということで、本日のまとめとさせていただきます(いとう よしと)

(いとう よしと)

図3. 学術機関リポジトリをBaseにした査読付電子出版システム(案)



事例報告(1)

文系研究者にとっての情報発信とは

京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター教授 武田 時昌

はじめに

いま経歴を紹介していただきましたが、私は、工学部電子工学科を卒業してから文学部に学士入学した者なので純粋の文系研究者ではありません。しかし、現在、人文研の漢字情報研究センターの教授を務めており、コンピュータと古典文献学の両域に出入りしている者として報告させていただきます。

私が所属する人文科学研究所では、昨年度末からリポジトリ事業のコンテンツ作りに積

極的に協力しています。研究所から公費出版している人文学報、欧文人文、東洋学報のバックナンバーすべてを、本年度中にPDF化して公開することになりました。どうしてコンテンツの提供に踏み切ったのかということですが、実はIT革命によって人文学は激変し、以前では考えられもしなかったような事態になっています。これからの人文学の行方を考えれば、Webサイトでの情報発信は不可欠です。それも、研究成果が読まれるためだけではなく、



学問方法論のスタイルを新たに模索する必要があると思います。文系研究者にとって、学問の楽園としてリポジトリを活用できるかどうかは大きな問題だと認識しています。

ワープロ革命の衝撃

私は中国科学史研究者ですが、ソロバンも研究しています。ソロバンの代わりに電卓が考案され、それがヒントになって小型のコンピュータが開発されました。私が初めてパソコンを手にするのが1985年です。当初はゲームくらいしか使えない代物だったのが、日本語ワープロとしても使えるようになったことは、とても衝撃的でした。手書き論文に比べれば、何度も書き替えられ、清書しなくてもいいというレベルですが、字がへたな人間はみんな飛びついたわけです。それに中国学者は旧漢字がそのまま利用できるのがうれしくて、漢字の復権を唱えながらJISコードにない外字を自分でたくさん作ったものです。まもなく麥谷邦夫先生がターボパスカルによる一字索引ソフトを開発されて、もはやワープロだけではなくになりました。カードを並び替えて丹念に作成した一字索引、語彙索引は文献学者のライフワークだったのですが、校勘したテキストを入力しさえすれば、パソコン処理によってあっという間に一字索引が出来上がる。典拠調べを生業とする我々にとって、こんな有難い話はありません。それからまだ

20年しか経っていませんが、驚くべき早さで技術革新がなされ、そんな話が当たり前になってしまうほど研究環境は一変してしまいました。

書写材料としてのワープロということ考えると、思考様式が今と昔とでは大きく変化していることがわかります。この頃の論文の文体は、ものすごく冗長であると反省しています。手書き原稿だと、面倒な書き直しを回避しようとする無意識が働くのか、頭の中でアイデアを絞ったあげくに簡潔な文章をアウトプットする。でも、ワープロだと、とりあえず思いつくことを全部書いて、後はカット＆ペーストして、みたいなことになる。思いついたことは記録できるが、記憶した情報を頭で練るということは少なくなる。これは書写材料が竹簡帛書から紙に変化して以来の大変革だと思います。

インターネット時代の人文学

人文研附属漢字情報研究センターは、東洋学文献センターを改組してできました。そのスタッフを中心に「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」という21世紀COEプロジェクトを立ち上げました。私はその教育部門のリーダーをやっていまして、毎年サマーセミナーを開催しました。総合テーマが「インターネット時代の人文学の技術」、個別テーマがそれぞれ「TeXからXMLへ」「XMLの世界への誘い」「検索の理論と技法」で、一週間パソコン実習を行いました。第一線で活躍する中国学研究者で情報学のスキルを身につけた方が、すでに何人もいらっしゃる。共同研究班で会読しているテキストをXSLTで処理したり、テキストや注釈の情報を内包したデータベース作成したり。そうした先生方を講師に招いて実践例を示してもらいました。受講者は文系の院生でパソコンの初心者だから、眼を丸くして聞いていました。情報学的なスキルがあればこんなことまでできるとカルチ

ャーショックでしたね。

データベースといっても、電子テキストのレベルではたいしたことはありません。しかし、注釈や校勘として書き込まれる情報をXML文書にマークアップしてやれば非常に優れた検索ができたり、あるいは元のテキストを復元できたりで、とても有用な研究資料になる。IT技術やインターネットはむしろ文系研究者の方がいろいろと活用できる。漢字情報学のために主宰した共同研究会で技術系の人から話を聞くと、何でもできますよ、と言うんです。アイデアがあれば、やりたいことを実現させるスキルはある。そんな便利な道具だから、使い出すと、もう元には戻れないでしょう。研究方法論そのものにかかわっていますからね。

もちろん欠点はいろいろあります。最近の中国では人海戦術で古典を入力し、『中国基本古典庫』という製品を売り出した。書庫一どころじゃない膨大な漢籍がたった一つのハードディスクに入れるような、そんな時代になっています。でも、検索語を思い浮かべないと検索できないし、用例が多すぎてかえって搜しきれないこともある。書庫に入って実物をめくれば、前後のページに有益な情報が発見できたり、その棚にある関連分野の本も自然に目に入る。そうした思いがけない出逢いが、新たなアイデアを生み出すことがしばしばある。典拠調べは容易になったけれども、マイナス面も大きく、文献考証の力は落ちるでしょうね。なにより漢籍は和綴りの線装本を手にするだけで得られる何かがある。書庫離れは文系研究者にとって致命的になるかもしれない。ですから、そうならないように、人文研COEプロジェクトでは、人文学に情報学的手法を取り入れつつ、デジタル化によって喪失するものを補完しながら、漢字文化の全き継承をめざすことにした次第です。

研究成果に永遠の生命を

人文研の公費刊行物は、古書店で高値がついていて、若手研究者が入手できないものがたくさんあります。それらをリポジトリで公開することはきっと喜ばれるでしょうね。それに共同研究班や国際シンポジウムの活動をリアルタイムで発信するのも悪くないと思います。その他に試みとして注目しているのは、名誉教授の方のコンテンツの登録です。

理系の場合では、10年前・20年前の論文は役に立たないのかもしれませんが、人文系の研究は今というよりはむしろ未来に語りかけているところもあります。書いたものには永遠の生命を賦与したいという不死願望が、著述活動の根底に常にあるわけです。そういう意味で、停年退職する際に集大成的な研究成果をリポジトリに登録してもらえようになれば、リポジトリ空間は通時代的な研究書が棲息する仙郷ユートピアになりうるでしょう。

ここで面白いデータを見ていただきます。学内と学外の図書閲覧の利用者数の変化です。学外の利用者が2003年ぐらいから増えて、以前の2倍以上になっています。また、文献複写サービスですが、これが2004年ぐらいから一挙に増えて、以前の1.5倍になっています。これは何故かということ、人文研で漢籍データベースを公開したために、図書館の利用が一挙に増えたからです。デジタル化するということは、実は図書館の利用を活発にする。当然、コンテンツ作りもあわせて多忙化は避けがたいでしょうね。リポジトリが楽園であるというのは、実は禁断の果実かな、とも思うのですが。

中国哲学的リポジトリ理念

最後に一つだけ中国哲学の観点からリポジトリの理念を提案しましょう。貴重な書物をできるだけ長く保存しようと思ったら、閲覧させないままにするのがいいんですね。これは「無為自然」ですよね。デジタル化した書物は幸せな隠遁生活が送れる。ある時代にも

のすごく役にたったものが、意外と将来はいらなくなって、役にたたないと思ったものが役に立つ。これが「無用の用」です。リポジトリの基本概念に老荘哲学はぴったりです。そこで附言したいのですが、中国哲学の命題

に「一而多、多而一」というのがあります。一にして多、多にして一。仮想空間に浮遊させるリポジトリ情報のコンセプトとして悪くないと思うのですがいかがでしょうか。

(たけだ ときまさ)

事例報告(2)

講究録データとリポジトリに期待するもの、不満なこと

京都大学数理解析研究所教授 長谷川 真人

はじめに

最初にお断りしておきますと、これからお話しすることは全く私個人の見解です。数理解析研究所の見解ではありません。私はこれまでリポジトリに関わることなく生きてきました。そんな私にリポジトリについて率直な意見を言え、というお話しがきました。何をいってもよろしい、ということでしたので、何をしゃべっても許されるであろうと思い、お話しさせていただきます。

私は、応用数学・計算機科学の研究をしています。もちろん論文は読みますし、書きます。主にヨーロッパの研究者が競争相手で、ふだん日本語の文献を読むことはあまりありません。

15年前から今までの変化

私の世代は最初からインターネットが目の前にありました。インターネットは使えて当たり前でした。ただ、その中でもいろいろと変化はありました。

15年前ですと基本的に紙に書かれたものしか信用できない、オンラインでは新しいものは手に入るが、それは間違っている可能性もある、という雰囲気でした。

しかし、10年ぐらい前にずいぶん状況が変わりました。その頃から個人でホームペー



ジを持って、自分の論文をせっせと載せ始めました。Googleはまだありませんでしたが、サーチエンジンがいくつか出てきていました。分野毎にいろいろなデータベースがありますが、私の分野でも論文検索のために非常によいものがこの頃にでてきています。ただ、コンテンツそのものはまだまだオフラインのものが中心で、図書室には頻繁に行っていました。ところが最近はオンラインのコンテンツが充実してきて、今では、研究室の1階下の図書室に下りることを面倒がり、とりあえずパソコンに向かって論文を手に入れようとするようになりました。

この15年間に何が変わったのかというと、信頼性と精度が当たり前になってしまったと

ということがあると思います。以前はWeb上のものは間違っていて当たり前、という感覚がありました。今の学生たちはWeb上にあるものを何でも信じてしまいますので、私には、そんな学生がかえって心配なくらいです。

リポジトリに不満なこと

Googleで検索すると、粗いデータではあるけれども、必要なものがずいぶんよく出てきて結構便利です。あわせて専門のデータベースを使うと、かなりきちんとフォローできます。そのようなものを使い慣れていると、今の京大のリポジトリには強く不満を感じます。見てくれについてはあまり気にしないのですが、英語のインターフェイスがないというのが、見た瞬間に「これではあかん」と。これでは、私なら仕事には使わないし、欧米の研究者が使うことは基本的に不可能であろうと思いました。

また、リポジトリではコンテンツの来歴が分かりません。最初のバージョンなのかどうか、査読付きの論文であっても、国際会議に出た論文なのか、あるいは学術雑誌のものなのか、などいろいろと気になることがあります。単に会議録といっても、研究分野によっては査読がなくて当たり前のものがあるかと思えば、査読があって当たり前のものもあります。会議録という言葉一つをとっても定義が分かりません。

アクセス数も検索ロボットが見に来ていることが多いのではないのでしょうか。私自身も自分のホームページのアクセス数を知っていますのでどのようなものなのかはだいたいわかります。

数理解析研究所講究録

数理解析研究所では講究録というものを発行しています。数理研では非常にたくさんの研究集会や共同研究をやっていて、そのような活動の記録として講究録を出版しています。

ですので講究録には査読がありません。内容は何でも有りです。そのようなことを専門外の方に説明するのは結構面倒なのですが、そういった情報がリポジトリには一切書かれていません。リポジトリを見ただけではそのようなことはわからないようになっています。講究録は、いいものも悪いものもごちゃ混ぜになったようなコンテンツなのですが、リポジトリの中にそのような文脈から切り離して論文を置いてしまうと、誤解の余地が出てくるのではないかと思うのです。

そのようなことを思いながら京大のリポジトリのトップページを見てみますと、最初に日本語の説明が3行ほど書いてあります。見落としていれば申し訳ないのですが、どこを捜してもEnglishのボタンがありません。何ヶ月か待ったら英語版ができるのかと思っていましたが、まだできていません。これは日本人しか相手にしないと宣言しているようなものです。次に検索をしてメタデータを表示させますが、これも全部日本語です。次の画面では論文のタイトルと著者名は英語で出てきますが、このスタイルでは、検索ロボットは来てくれるでしょうけど、欧米の研究者には見てもらえません。私たちは自分たちで一生懸命英語のホームページをつくっています。いろいろな情報を書き足して、論文を利用してもらえる工夫をしています。出版社や学会でもこのような努力をしているところは多いと思います。少なくとも私の研究分野ではそうです。

講究録には著作権や来歴のことなどデリケートなことがたくさんありますので、リポジトリに講究録が入ったよ、と言われても、それだけで手放して喜ぶことはできません。ただ、何はともあれ講究録は膨大な量があり、それが永続的に蓄積されるようになったことは、とても良いことだとは思いますが、とはいえ、ただそれだけのことです。研究現場で今まさに情報を発信しているものにとっては、京大

のリポジトリを使って情報発信していく気持ちにはまだなれません。使いにくいですし、何より英語がないので研究者仲間に教えてもあまり意味がありません。私としては、リポジトリは、学外はもとより海外の人も見ているものであるという視点をもう少し持っていたきたいということです。研究情報の発信

ということであれば、英語の点で努力していただきたいと思います。海外の機関と連携してリポジトリをつくる、という発想もありえると思います。準備してきたものは以上ですので、少し短いですが、終らせていただきます。

(はせがわ まさひと)

事例報告(3)

学術情報リポジトリの苦勞と喜び

- コンテンツ登録と著作権の実務 -

京都大学附属図書館情報管理課電子情報掛長 村上 健治

はじめに

学術情報リポジトリの構築に関して、著作権関係を中心に業務の内容を簡単にご報告します。

著作物をリポジトリに登録するにあたっては、著作権者の方から著作権の許諾をいただく必要があります。具体的には複製権と公衆送信権になります。紙に印刷されたものから電子化をする、サーバにコピーする、Wordの文書をPDFにする、リポジトリに入っている論文を利用者が印刷する、といったことには全て複製権が関係してきます。サーバにコンテンツを登録し、これを利用できる状態にするためには、公衆送信権の許諾を得ておく必要があります。

電子化・公開の手順

京都大学で紀要の電子化をおこなった手順ですが、まず著作権者の方から著作権の許諾を得なければなりませんので、調査用のリストをつくりました。どちらにしても目次データを作らなければなりませんので、その作業

の一環としておこないました。次に著者名でソートし、個人の著作リストをつくります。著者の名前が日本語表記になっていたり英語表記になっていたりしますので、名寄せ作業が必要です。その後に著者の方々の連絡先を調べるわけですが、これが結構大変な作業になります。著作権台帳、職員録、大学の研究者総覧といったもので連絡先がわかる場合も多いのですが、例えば、大学院生の方が紀要に論文を書かれていても、卒業・就職してしまいますと、その行方がなかなかつかめません。このような連絡先の調査は外部の専門の方にやっていただいたのですが、本当にキリのない作業になってしまいます。その作業についてもある程度のところでキリをつけまして、連絡先の方から著作権の許諾依頼状を送っています。その後、返送されてきたものを整理し、論文をリポジトリに登録するという作業をしています。

許諾依頼作業の結果

昨年度におこなった作業の中から人文社会

系の紀要2件の許諾依頼の結果を報告します。いずれも1990年から2006年に発行された論文を対象としています。一方は、著者の人数が156名、論文が252件ありました。「許諾します」という回答があったのが全体の74%、不許可の方が2名、未回答が約18%、連絡先不明が7%です。回答をお寄せいただいた方のほとんどの方から許諾が得られています。もう一方の紀要は、著者の人数が297名、論文が631件ありました。結果は、論文数にして約59%の方から許諾が得られています。40%の方は未回答、あるいは、連絡先不明です。

次に学術雑誌掲載論文に関する許諾依頼の結果です。AIP,APSなど著者の許諾があればリポジトリに出版社版のPDFの掲載を許可している出版社の論文について許諾をお願いしました。この時は論文の分野と年代、調査対象部局を限定して115名の先生方が書かれた566論文について電子メールで照会しました。結果として58%の方から許諾が得られました。許諾しない、というお答えの方もおられましたが、その理由は「ほかの大学で残した業績だから」とか「共著者が中心になってまとめたものだから」といったお答えでした。未回答の方が約40%あるのが気になりますが、この中には他の電子メールに埋もれてしまって見落とされている場合もあると思われます。

図書の電子化もおこないました。著者の方から電子化・公開の許諾がいただけたので、出版社に問い合わせたところ、既に絶版しているのでテキストの部分は電子化してもよい、との回答がありました。ただ、図書に掲載されている写真については、出版するという前提で許諾をもらっているのだから、電子化するならば、それぞれの著作権者から許可を得てほしいとのことでした。そうなるといくつかの可能性が考えられます。著者が撮影した写真であれば登録できますが、撮影した人の連絡先がわからなければ登録できません。連絡先がわかった場合でも掲載料を請求されたケー

スがあります。この判断にあたっては、リポジトリへの登録にどこまで予算をかけることができるのかということも関係してきます。

以上のことをまとめますと、最初からわかっていたことではあるのですが、過去に発行された資料の電子化の作業はけっこう大変でした。資料の電子化作業自体は、スキャナーの高機能化もあり、ある程度コストを下げることでもできるのですが、著作権の許諾依頼作業は全くの手作業になります。コストダウンを考えるのであれば、印刷物の納品時にPDFデータも納品してもらい、論文の投稿時に電子化に関する許諾が自動的にいただけるような形にするといったことがどうしても必要になります。

学術情報リポジトリ構築の喜び

これまで、学内の先生方にもいろいろとご協力いただいた結果、リポジトリの登録件数が1万件を超えました。登録件数が増えると、仕事をしている担当者としても単純にうれしいのですが、やはり、リポジトリに登録された論文が利用者の方に手軽に使っていただけるようになり、その利用者の方に喜んでいただける、ということがリポジトリの意義の一つではないかと思えます。必要な論文が必要な利用者のもとに届けられるようリポジトリを構築していければ、と思っています。また、1万件目の論文は理学研究科の先生が書かれた論文なのですが、後日、その先生からリポジトリに登録することによって論文を学内外に公開することができて、とてもうれしいという旨のコメントを頂きました。このように研究者の方々に喜んでいただけることも担当者としてはうれしいことです。

京都大学学術情報リポジトリ

最後に、簡単に京都大学学術情報リポジトリについてご紹介いたします。平成17年度にシステムを構築し、平成18年6月7日に試験

公開、10月2日に本公開しています。コンテンツは現在のところ紀要が中心になっています。紀要を電子ジャーナルのようなかたちで利用できるようにシステムのカスタマイズをおこなっています。また、これから博士学位論文の電子化に取り組んでいきたいと考えています。当面は「紀要の電子ジャーナル化」「博士学

位論文の電子化」の2点を中心にしたいと考えていますが、それ以外にも、様々なデジタル資料の保管庫として活用していきたいと考えています。リポジトリを利用する方々に喜んでいただけるようなシステムを構築していきたいと考えていますので、みなさまのご協力をよろしくお願いいたします。

(むらかみ けんじ)

討論会

「大学の果実をどのように味わうか - これからの機関リポジトリ」



パネリスト：西村氏、膝館氏、伊藤氏、武田氏、長谷川氏
司 会：大西機構長

講演、事例報告の内容について会場からの質問にパネリストが応える形で質疑応答が行われ、京都大学のリポジトリをはじめ、機関リポジトリの今後のあり方、著作権処理の問題、リポジトリ事業の継続性等に関して活発な討論が行われた。

会場からの質問：京都大学のリポジトリを今後どういうものにしていくのかという哲学、そして大学としてのポリシーは存在するのか。また、ヒューマンズ的な要素を、どう取り込んでいくのか教えてほしい。

パネリスト：経験から言って地方からの情報や在野の研究者が発信する情報へのアクセスにはこれまでいろいろ困難さがあった。しかしインターネットの普及によりそうした問題は軽減されてきており、そうした在野の情報

にもおもしろいものがあることがわかってきた。Wikipediaに象徴されるような、多様な情報との交流を図ったり、雑多なものも取り込むような形で、インターネットの可能性を活かしていくためには、リポジトリのポリシーは緩やかなものでよいのではないだろうか。

パネリスト：広い学問分野をカバーしている京都大学として、「機関」というくくりの下にいろいろなものが存在するというユニークさを出していきたい。そういう意味で京都大学

としての特徴は、まだリポジトリに出せていないかもしれない。

パネリスト：前半の報告では、文系対理系という構図があったように思う。経済という文理の中間的位置から発言したい。専門家から見ても意味がないとされる情報でも、違う分野から利用する可能性があればリポジトリに登録する意味はある。勿論、英語のインターフェースが必要であるという指摘は同感であり、これからの課題である。伊藤先生のご講演には、大変感銘を受けたが、査読システムという巨象に鼠が立ち向かうような印象を受けたがどうだろうか。今後のリポジトリのあり方を提起してみたい。まずNatureやScienceに対抗できるような軸を出せるのかという問題がある。世界の研究者が「京大のリポジトリをみたら何かがある」という期待感を持って見に来るような状況はまだ難しいが、そうしたあり方を目ざすことはありうる。

たいしたものがないと思って見てみたら、実際には多様なものがあっただというわくわくした感覚や「論文とたわむれる」という感覚は大事であろう。ただ、「読んで失敗した」というような類の論文まで取り込むかどうかは今後の課題といえる。「読んでみたら意外にいいものがあっただ」というのが方向性ではないかと考えている。

パネリストからの質問：資料は、貴重書に指定されてしまうと簡単には読めなくなってしまう。リポジトリのおもしろさには、貴重な資料も読めるということがある。また、博士論文も公開して、京大というものをあえて世に問うというのも、重要ではないかと考える。また京大のリポジトリに搭載されるのは、書物、論文といった文字媒体だけではないという期待があるがどうだろうか。

パネリスト：京大にはフィールドワークという伝統がある。映像や音声等を含めた多様なデータも投入していきたいが、体系的な課題

等があるので、検討しているところである。

パネリスト：学内の部局からは、多様なものを搭載して欲しいという声がある。その中で何をセレクトするのか、というのは課題であろう。これまで図書館には「残す」とことについてのポリシーがあったはずだが、今後は「何を選ぶのか」という課題が問われることになる。

パネリスト：初めからデジタルで作成されているオープンデジタルのものは、選別をせずに残していく時代になるのではないだろうか。ハードディスクの大容量化が進んで技術的制約がなくなったことは、残すことに関する方法論にも影響を及ぼすようになってきている。すべてを残した上で、判断は次世代に委ねるという考え方もできる。

会場からの質問：それぞれの論文の著者に公開の許諾を得るための著作権処理には大変な手間がかかる。この問題について、学会や先生と話す、「想定されるリスクは少ない、あるとしたら万一訴えられたとき大学の名前に傷がつくことくらいだろう」と言われることがある。学術論文等は、フェアユースの論理で電子化を進めてしまうことはできないだろうか。

パネリスト：文化庁著作権課には、「学術論文とそうでないものの切り分けができるのではないか」ということを言っている。しかし、出版社や学会等の著作権者にはいろいろな意見があるので、著作権課は「権利者と利用者間で解決してほしい」というスタンスである。あくまで個人的な考えだが、電子化してしまっても構わないのではないかと考えている。

パネリスト：学内紀要などは電子化してしまえないものだろうか。

パネリスト：役員会などでオーソライズできれば、法人としては可能であろう。ただし、全ての学部了解を得るのは難しいかもしれないが。

パネリスト：文部科学省としての見解はいかがか。

パネリスト：文部科学省としては、著作権課

の回答と同じである。紀要に関しては、論文作成者と編集者と読者が近い関係にあるので、包括的に承認を得るようなことがやりやすいのではないか。裁判で闘ってみるというのも一つの方法かもしれないが、まずは大学としてのポリシーやルールを整備するなど、できるところから進めていく、というのが大事ではないだろうか。

会場からの質問：リポジトリ事業に関わる人材の育成方法に関心がある。現場では同じ館内でも「隣の係が何かやっている」というような温度差があるように思う。リポジトリ業務を図書の日常業務に落とし込むべきか、それともリポジトリ専門のセクションを作るのがよいのだろうか。日常業務とするなら、だれでもできるようにマニュアル化したり、著作権処理の知識を身に付けさせることが課題と感じている。

パネリスト：現在は、CSIの経費でリポジトリ事業が行われているのが現状であり、今後どうするかは難しい課題である。将来的には、メタデータの作成やコンテンツの登録、著作権処理のチェックなどが自動的にできるしくみが構築されるかもしれないと考えているが、この数年は、図書館がやらざるを得ないのが現状であり、できれば財政的な支援の継続が望ましい。事業経費がつかなくなったときに、「枯れてしまう」リポジトリも出てくる可能性もないわけではない。なお、「図書館はリポジトリのことだけをやればよい」というのは、適当ではないと思う。図書館業務は変革する部分もあるが、文化の継承で変わらない部分も当然ある。あるいは今後、

リポジトリとは違う新しい機能も当然生まれてくるはずである。

パネリスト：京都大学のリポジトリ事業経費の見通しはいかがか？

パネリスト：個人的見解だが、大学はある程度は支出すると思う。そのためには、リポジトリに価値があることを示す必要がある。今の役員会の雰囲気は「お金が来るのであればやればよい」という状況で、そこを乗り越えてはいないと思う。

パネリスト：お金をかけなければできないというわけでもなく、例えば工学研究科はリポジトリに博士学位論文を登録するシステムを作り上げつつある。

パネリスト：慶應大学では、リポジトリ専従のセクションはない。慶應大学の出版会、学会と連携している。そのため、コンテンツはCD-ROMに入って雑誌受入担当に届く。その後目録担当がメタデータを整備して、システム担当が登録するという通常の図書館業務の中で処理ができています。もちろん、印刷時に作成するデジタルデータについて、出版者側としっかり詰めておく必要がある。

司会：今回のキーワードは、「大学のたわわな果実がどれほど甘く熟しているかをじっくりと味わうには」だが、実は果実はまだ熟しきっていないし、それを提供する手段も不十分であることが分かったのではないかと思う。ハード面での仕組みは整いつつあるので、今後はソフト面を整備していくことになるだろう。私たちには皆さんの知恵が必要であり、図書館へのご意見をお待ちしている。

■ 京都大学学術情報リポジトリに関するお問い合わせ先 ■

京都大学附属図書館電子情報掛：〒606-8501 京都市左京区吉田本町

TEL：075-753-2618 FAX：075-753-2649

e-mail：dlkyoto@kulib.kyoto-u.ac.jp

京都大学学術情報リポジトリ総合案内サイト：<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/kurir/index.html>

京都大学学術情報リポジトリで京都大学学術出版会の出版物を公開

京都大学附属図書館が国内初の連携プロジェクト開始

京都大学附属図書館は、学内の研究・教育成果を広く社会に発信するため、2007年12月から京都大学学術出版会との連携プロジェクトを開始した。同出版会が発行する研究書を電子化し、京都大学が設置するインターネット上の電子書庫「京都大学学術情報リポジトリ」（愛称：KURENAI 紅）に登録して、無料で公開する。公開された研究書は、本文中のキーワードにより検索サイトなどからも探すことができ、世界中から閲覧することが可能となる。

「京都大学学術情報リポジトリ」は、全学的な取り組みとして附属図書館が中心となり、各部局と連携しながら積極的に推進している事業である。ここには、尾池和夫総長の著書や、山中伸弥教授の研究グループによるiPS細胞（ヒト人工多能性幹細胞）に関する論文の著者原稿など、学内の研究・教育成果の結晶である

学位論文や学術雑誌掲載論文、学内刊行物に掲載された論文が電子化・蓄積されており、約1万2千件を無料で公開している。

今回、連携プロジェクトの第一弾として、2008年2月1日に、各界の著名な学術賞を受賞した研究書5点が京都大学学術情報リポジトリで公開された。

同出版会が編集・発行する信頼性高い研究書をインターネットを通じて公開することは、全世界に向けて京都大学の研究・教育成果を広め、存在感を示すことに繋がる。また、大学出版会と大学図書館とのこのような連携プロジェクトは国内初の試みであり、大学の研究・教育成果の発信・流通を支える図書館と大学出版会との新たな学術コミュニケーションの可能性を広げる非常に画期的な取り組みである。



日本語指示体系の歴史(第31回金田一京助記念賞受賞(2003))



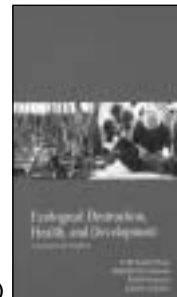
ハイデgger研究(2003年度宗教学会賞受賞(2003))



気象と大気のリモートセンシング
(第15回大川出版賞受賞(2006))



歴史としての生命：自己・非自己循環理論の構築(2000)



Ecological Destruction, Health, and Development
(第11回APPA(アジア・太平洋出版連合)出版賞金賞受賞(2005))

<一冊の本シリーズ 8 >

柳田国男編 『採集手帖（沿海地方用）』

- 「京都帝国大学国史研究室内 民俗調査会」寄贈図書から -

京都大学人文科学研究所助教 菊地 暁

柳田国男（1875-1962）によって創始された日本民俗学が確立されるのは1930年代というのが通説だ。『民間伝承論』（1934）『郷土生活の研究法』（1935）といった理論的著作の刊行、学会組織「民間伝承の会」の設立（1935）「分類語彙」刊行によるデータの整理と共有化、等々がそのメルクマールとされている。

そしてもう一つ、全国的規模の調査事業が挙げられる。日本学術振興会の助成により1934-36年「山村調査」、1937-38年「海村調査」が実施される。それぞれ全国50箇所の調査地を選び、統一フォーマットに基づいてデータを採集し、その比較検討から日本文化の本質と変遷に迫ろうというプロジェクトだ。「緒言」は、「日本の国柄の特質を、もつと深く知りたいといふ要望が、近頃大層盛んになつて来ました」、「抽象的な議論は、もう飽きるほど並べられて居りますが、それではどうにもならなくなつて居るのです。この機に臨んで我々は、生活自身が語る具体的な資料を数多く蒐集し、比較し整理し、その資料をして自ら語らしめる方法を、更に進めてゆく必要があります」と述べ、日本民俗学（という言葉はここでは用いていないのだが）の独自のスタンスを鮮明にしている。

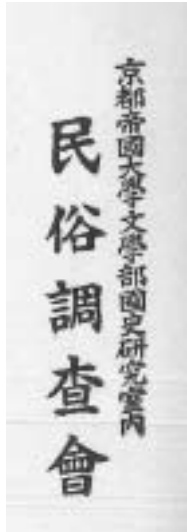
『採集手帖』はそのための統一フォーマットである。ここでは昭和12年、民間伝承の会より刊行された柳田国男編『採集手帖（沿海地方用）』について紹介しよう。「村の起こり」から「仕合わせな家」に至る100の調査項目は、それぞれ、村の歴史、生業、生活、互助組織、信仰、年中行事、口頭伝承などの情報を引き

出すために柳田国男によって考えられたものである。第40項「自分は少しも笑はなくても、よく人を笑はす人がありますか」など、いっけん何を調べたいのかわかりかねる項目も少なくないが、いずれも当時における柳田の問題意識が反映された戦略的な質問だ（上記の例は、「笑い」の持つ制裁力、社会統御機能が問題となっている）。こうした質問項目が文庫版サイズの手帖の見開き右側に配され、残りの空欄にデータを書き込めるようになっている。これに従って調査データを記入していくと自ずから一つのモノグラフが出来上がるというわけだ。各地の調査協力者から柳田に届けられた採集手帖は、現在、成城大学柳田文庫に収められている。

以上は日本民俗学の常識的解説であり、本題はここから先だ。

さて、この『採集手帖』、京都大学にも所蔵されているのだが、どこにあるのかというと、フィールドワークの盛んな農学部や理学部ではなく文学部、しかも、フィールドワークに関係の深そうな社会学や人文地理学ではなく、文献史学の牙城・国史研究室（現日本史学研究室）である。さらに注目すべきは、これが「京都帝国大学国史研究室内 民俗調査会」なる団体の寄贈図書であることだ。

これは、1982年、文学部博物館（現総合博物館）建設のため、文学部陳列館の北西部が解体された際、そこに収められていた図書106冊が文学部図書館に寄贈されたもので、分類記号でいうと、「え1（史学の補助学科 - 人類学、人種学）」「せ8（文学芸術 - 民謡、俚諺）」「た（風俗史、日本考古学、民族学）」「つ（日本地理 -



地方誌)」などに配架されている。今のところ目録等は未整備だが、表紙裏に捺された「京都帝国大学国史研究室内 民俗調査会」という印によってそれと知ることができる。[写真参照]

実はこの「民俗調査会」、いかなる活動をしていたのか、ほとんど明らかでない。1927年、国史の主任教授・西田直二郎(1886-1964)を中心として史学科の学生が

集まり、京都帝国大学に「民俗学談話会」を設立、その後、「民俗学研究会」「民俗学会」と名称を改めつつ、戦後しばらくまで断続的に活動を続けていたことが知られているが、この会と「民俗調査会」が異名同体である蓋然性は高い。とはいえ、前者の実態もなお不明な点が多く、その意味でこの寄贈図書は当時の学問状況を伝える貴重な糸口である。

じっさい、蔵書の内容は非常に興味深いものだ。民具、民家といった物質文化から、社会組織、祭礼芸能、口頭伝承まで民間伝承全般を扱っているばかりでなく、対象地域も日本およびその近隣諸国に広がっている。さらに、人類学、考古学、先史学、古代史などさまざまな隣接分野の著作が含まれ、翻訳の和書ではあるが、フレイザー、レヴィ=ブリュル、ファース、マリノフスキーといった人類学者の著作も含まれている。民俗学から人類学までゆるやかに連続した幅広い関心のあり方がうかがえよう。しかもこれが、「国史研究室」で集められたものなのである。

民俗学・人類学が歴史学徒たちから注目を集めていたわけだが、実はそれにはそれなりに長い背景がある。国史、東洋史、西洋史、人文地理学、考古学の五教室から出発した京大史学科は、地理学、考古学といった非文字資料を扱う分野を包摂するなど、当初から狭

義の文献史料にとらわれない多様な史料の探求が試みられ、また、内藤湖南、原勝郎などの重量級のスタッフたちは、そうした学問的越境を果敢に試み、狭義の専門にとらわれない独自の学風を打ち立てていった。こうした環境に育まれたのが史学科一期生の西田直二郎である。その西田はケンブリッジ大学留学の際にハットン、リヴァーズなどの社会人類学を受講、人類学が歴史学とりわけ古代史を革新させる重要な方法であると確信し、帰国後、京都府神職会の寄付講座として神道史講座を実現すると、柳田国男、折口信夫(民俗学)、原田敏明(宗教学)、赤松智城(朝鮮・満蒙宗教民族学)、宇野円空(東南アジア宗教民族学)など当代一級の講師陣による集中講義を実現させた。こうした環境のなか、フィールドワークという方法にも関心が寄せられ、熱心な学徒たちによってその実践が試みられていったわけである。

さて、「探検大学」の異名をとる京都大学において、その重要な人材供給源が今西錦司、梅棹忠夫に代表される理学部・農学部の生態学グループにあることは周知のことだろう。彼らがモンゴルやアフリカで大規模なフィールド踏査を敢行し、そこから「今西進化論」「文明の生態史観」といった独自の理論的展望を導き出していたことは、ユニークな学風を誇る京都大学においてもとりわけ傑出したものといえる。とはいえ、フィールドワーカーを輩出したのは理学部・農学部に限られたことではない。川喜田二郎(1920-)、岩田慶治(1922-)、石川栄吉(1925-2005)など、錚々たるフィールドワーカーたちを送り出した文学部史学科も重要な供給源の一つだった。そして彼らを産み出す直接間接の知的背景となったのが、上述の民俗学の展開だったといえよう。

「京都帝国大学文学部国史研究室内 民俗調査会」寄贈図書は、「探検大学」京都大学のもう一つのオリジンを伝える貴重なコレクションなのである。

(きくち あきら)

教員著作寄贈図書一覧

(平成19年7月～平成20年1月)

身 分	寄贈者氏名	寄 贈 図 書 名	出 版 社	出 版 年
総 長	尾池 和夫	活動期に入った地震列島 新版(岩波科学ライブラリー138)	岩波書店	2007
名 誉 教 授	今西 信嗣	Focused ion beam systems : basics and applications	Cambridge University Press	2007
名 誉 教 授	河合 忠一	Cardiomyopathy update	Elsevier Japan	2007
文学研究科	苧阪 直行	The cognitive neuroscience of working memory	Oxford University Press	2007
文学研究科	苧阪 直行	Object recognition, attention, and action	Springer	2007
教育学研究科	川崎 良孝	図書館の原則：図書館における知的自由マニュアル第7版 改訂2版	日本図書館協会	2007
教育学研究科	川崎 良孝	民主的な公共圏としての図書館	日本図書館協会	2007
経済学研究科	岡田 知弘	グローバリゼーションと世界の農業	大月書店	2007
経済学研究科	黒澤 隆文	スイスの歴史と文化	刀水書房	1999
理学研究科	笹尾 登	電磁気学への入門(岩波講座物理の世界 電磁気学1)	岩波書店	2007
人間・環境学研究科	稲垣 直樹	フランス 心霊科学 考：宗教と科学のフロンティア	人文書院	2007
人間・環境学研究科	高橋 由典	行為論的思考：体験選択と社会学	ミネルヴァ書房	2007
人間・環境学研究科	廣野 由美子	視線は人を殺すか：小説論11講(歴史・文化ライブラリー11)	ミネルヴァ書房	2007
人間・環境学研究科	前川 玲子	アメリカン・ルネサンスの現在形	松柏社	2007
アジア・アフリカ地域研究科	平松 幸三	音環境デザイン(音響テクノロジーシリーズ12)	コロナ社	2007
地球環境学	柏 久	「生きる」ための往生：李登輝台湾前総統恩師柏祐賢の遺言	昭和堂	2007
人文科学研究所	高田 時雄	轉型期的敦煌學	岩波書店	2007
高等教育研究開発推進センター	伊藤 佳世子	The play writing of Eugene O'Neill its process and technique	Book East	2007

この一覧は寄贈者著作のみの掲載となっております。上記以外にも多くの図書を附属図書館や部局図書室にいただきました。今後とも蔵書充実のためご寄贈いただきたくよろしくお願いたします。

図書館の動き

平成19年			「国立国会図書館におけるレファレンスの方法論」
12月 3日	京都大学図書館協議会第一特別委員会(情報資源) (平成19年度第3回)	24日	図書系連絡会議(平成19年度第9回)
4日	平成19年度京都大学図書館機構公開企画展「古典籍がよみがえる-京都大学貴重資料修復記念展」(～24日)	30日	DRFIC=デジタルリポジトリ連合国際会議2008(大阪大) (～31日)
6日	平成19年度第1回京都大学図書館機構講演会「古典籍の修復と取り扱い」	2月 8日	京都大学図書館協議会第一特別委員会(情報資源) (平成19年度第4回)
10日	京都大学図書館協議会幹事会(平成19年度第5回)	8日	図書館システム運用協議会(第5回)
14日	京都大学図書館協議会(平成19年度第4回)	14日	学術情報リポジトリ検討委員会システム運用作業部会(第3回)
19日	学術情報リポジトリ検討委員会システム運用作業部会(第3回)	20日	大学図書館近畿イニシアティブ運営委員会(第2回) (大阪市大)
20日	図書系連絡会議(平成19年度第8回)	21日	京都大学図書館協議会第二特別委員会(情報サービス) (平成19年度第3回)
平成20年		21日	学術情報リポジトリ検討委員会(第8回)
1月 8日	京都大学附属図書館運営委員会(平成19年度第2回)	25日	京都大学図書館協議会幹事会(平成19年度第6回)
16日	平成19年度第2回京都大学図書館機構講演会	28日	図書系連絡会議(平成19年度第10回)
		29日	京都大学図書館協議会(平成19年度第5回)

目次

特集：学術情報リポジトリ・シンポジウム

主催者挨拶	西村 周三	1
基調講演1：大学図書館と機関リポジトリ	膝館 俊広	2
基調講演2：機関リポジトリが大学にもたらすもの、変えるもの	伊藤 義人	7
事例報告1：文系研究者にとっての情報発信とは	武田 時昌	11
事例報告2：講究録データとリポジトリに期待するもの、不満なこと	長谷川真人	13
事例報告3：学術情報リポジトリの苦労と喜び - コンテンツ登録と著作権の実務 -	村上 健治	15
討論会：テーマ「大学の果実をどのように味わうか - これからの機関リポジトリ」		17
京都大学学術情報リポジトリで京都大学学術出版会の出版物を公開		20
柳田国男編『採集手帖(沿海地方用)』<一冊の本シリーズ8>	菊地 暁	21
教官著作寄贈図書一覧		23
図書館の動き		24

編集後記

4年前にはじめて特集記事で触れてから多くの紙面を割いてきた「機関リポジトリ」。とりあげるのは今回で4度目となります。大学、図書館界をあげて力を注ぐ熱い話題です。今回の特集で利用する側、提供する側との間、また各々の中においても、まだまだ温度差のある取り組みだということが浮き彫りになっているのではないのでしょうか。機構誌「静脩」は今後も機構行事を報告していきます。(editor)